

第6次瀬戸市総合計画評価委員会 議事録

日時：令和2年2月26日（水） 10：00から12：00まで

場所：瀬戸市役所 北庁舎4階 庁議室

出席委員：石川 良文（座長）、澤田 景子、伊藤 勉、河村 誠悟（代理出席：鈴木 政成）、水野 和郎、南 慎太郎、林 ともみ、萱岡 愛、小坂 英雄（順不同、敬称略）

事務局：市長、副市長、経営戦略部長、政策推進課長、政策推進課長補佐、政策推進課政策係長、政策推進課政策係員

使用資料：資料－1 第6次瀬戸市総合計画評価委員会について
資料－2 第6次瀬戸市総合計画の中間評価と瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の見直しの関連性について
資料－3 第6次瀬戸市総合計画の指標の状況について
参考資料1 第6次瀬戸市総合計画（概要版）
参考資料2 瀬戸市人口ビジョン まち・ひと・しごと創生総合戦略（概要版）
参考資料3 第6次瀬戸市総合計画におけるこれまでの取組み
参考資料4 第6次瀬戸市総合計画 市民アンケート調査結果報告書

市長挨拶

大変忙しい皆様にご無理を申し上げ、また、こういう情勢の中でお集まりいただきましたこと、心から厚く御礼を申し上げたいと思います。

日頃より各分野でご活躍の皆様でございますが、瀬戸市政に対しまして深いご理解と格別なご協力を賜っておりますこと、重ねて御礼を申し上げたいと思います。

「第6次瀬戸市総合計画（以下「総合計画」という。）」は、平成29年度からスタートし、おおむね3か年を経過したところでございますが、3か年が経過し、定性的な評価となるアンケート調査を行い、総合計画の現状を把握したところでございます。

本日は、ご参加いただきました委員の専門的な知見のもと、全体の中でこういう方向に行くべきではないか、これは少し見直したほうがいいのかというようなことも含めまして、ご意見を頂戴 したいと思っております。

総合計画は、10年先を見据え、「住みたいまち 誇れるまち 新しいせと」という大きなスローガンの中に3つの目指す都市像、簡単な言い方をすると「元気づくり」、「人づくり」、「地域づくり」に「行政財政改革」を交えた計画でございます。

忌憚のないご意見を頂戴しながら、瀬戸市民がよりよい生活を送れるような環境づくりのためにご協力、ご指導いただければ、大変嬉しく存じます。

どうぞ、よろしく願い申し上げます。

1 第6次瀬戸市総合計画評価委員会について

◆ 資料－1、2に基づき事務局から説明。概要については以下のとおり。

➤ 資料－1 第6次瀬戸市総合計画評価委員会について

本委員会の目的は、総合計画の評価等と総合計画のパイロットプランとして位置付けた

「瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略（以下「総合戦略」という。）の検証等を同時に実施することである旨、また、本日の議事においては、主に総合計画に掲げた指標の検証と効果的な事業実施のあり方について議論を行う旨を説明した。

➤ **資料－２ 第６次瀬戸市総合計画の中間評価瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の見直しの関連性について**

本日は、「総合計画」の評価を、それを踏まえ「総合戦略」の検証と見直しに向けた会議を５月、８月、１１月ごろに開催し、１２月には、第２期総合戦略を公表するスケジュールを予定している旨を説明した。

- ◆ 本委員会の座長として、南山大学の石川委員を市長が指名し、以降、委員会の進行を石川座長が務めることとなった。

２ 第６次瀬戸市総合計画の中間評価について

- ◆ 資料－３に基づき事務局から説明。概要については以下のとおり。

➤ **資料－３ 第６次瀬戸市総合計画の指標の状況について**

将来像の実現度合いを評価する指標として、下記①～③(人口に関するもの)及び④～⑥(市民アンケートに関するもの)として、都市像ごとの各指標(各種統計情報および市民アンケートの数値)の動きについて説明がなされた。

① 人口（外国人含む）	: 129,754人 [130,676人] *922人減
② 人口の構成（被扶養者1人当たり成人人口）	: 1.14人 [1.18人] *0.04人減
③ 社会増減（日本人のみ）	: 93人の社会増 [120人の社会減]
④ 住みやすさ	: 77.6% [77.0%] *0.6ポイント増
⑤ 住み続けたい	: 61.3% [63.4%] *2.1ポイント減
⑥ まちへの愛着	: 74.4% [80.6%] *6.2ポイント減

※令和元年の数値[括弧内は総合計画策定時の平成28年の数値]

【資料3(参考資料3、4)の説明に関する質疑応答】

《座長》

ただいまの説明につきまして、ご質問があれば、お受けしたいと思います。何かございますでしょうか。非常に分かりやすく資料を作っていただいています。簡潔に示している部分もあるので、細かい質問も結構だと思います。

(委員)

そもそも13万人の人口というところからスタートしていますが、そのときに外国人の方を含むか否かの議論をしておりましたでしょうか。この数字は、外国人の方を含んでいる人口ですよ。

[事務局]

日本人の方、外国人の方と分けた議論はしておらず、先ほどご説明した数値は両方を含んだ数値です。

(委員)

変な捉え方をされると困りますが、まずは、日本人の方が増えたり減ったりという議論が中心にあるべきと思っております。「日本人は何万人と減って、外国人が何万人と増えていくので、人口はドローだ」という議論があることも承知していますが、両方を含んだ計算方法で進めて、将来的に良いのか、という想いがあります。

今般、世界的な病気が流行しただけで、これだけ人の移動が止まるということが分かった今、人口の視点でも議論を深める必要があると考えます。外国人の方を含まないスタートとなると、外国人人口の約4,000人が差し引かれることになるので、かなり違う数字が出てきてしまうわけですね。

〔事務局〕

第6次総合計画の策定時にはその議論はしていないと記憶しており、総合計画の指標の観点から、現時点ではそういった数値の表し方はしておりません。本日の評価委員会のご意見も含め、今後、どのような指標管理を行うかについて検討する必要があると考えます。

〈委員〉

差が大きくなっていくのではないかという危惧があります。

〔事務局〕

そういった視点も当然今後考えられます。人口の指標については、どういう扱い方をするかは、またご意見を賜りながら考えていく必要があるかと思えます。

なお、資料3の1ページ目にある〔人口に関わる指標〕の③に社会増減の状況があり、これは転入・転出の状況ですが、これは委員ご指摘の日本人だけをカウントしています。〔人口に関わる指標〕の①の総人口「12万9,754人」は外国人を含めた数値ですが、③番の社会増減の数値「93人の増加」は日本人だけの数値ですので、委員ご指摘の視点で見ていただくことは可能になっています。

《座長》

人口は様々な数値の取り方があり、統計的には国勢調査によるデータと住民基本台帳によるデータがあります。この実績は住民基本台帳の人口に沿って作られていると思ってよろしいですね。住民登録がなされていれば、外国人の方も日本人の方も、住民基本台帳人口に載ってくるので、総人口には外国人が含まれています。

ただ、指標として社会増減は日本人のみで見ていくということなので、これ以外に外国人の流動があるかもしれません。そういうところも細かく見て検証する必要があると思えます。

〈委員〉

参考資料3で、達成率の星が黄色く全部塗られているものと半分のもの真っ白のものとのありますが、産業界の実感とイメージが異なるものもあります。何を基準に達成されたと見たらいいのでしょうか。

〔事務局〕

市の予算事業について、それぞれ目標値を掲げて取組みを実施しています。達成率は、平成30年度の目標値と実績値の割り戻しの率を表示しています。資料の上部に、凡例が掲載されておりますが、100%以上が黄色、70%以上が半分黄色、70%未満が白色という3種類

の位置づけでマーキングしており、重点事業毎に平成30年度の目標値に対する平成30年度の実績値の割合による計算によって求められる「達成率」を左横に示しています。

例えば、企業誘致推進ですと、これを開始するときには4件の工場等の新增設を目指して取り組み、平成30年度中の実績が6件ありましたということで、割り返すと150%になります。

〈委員〉

参考資料4ページ、5ページのツクリテ支援などは、事業概要と今後の方針を見ると、「定着促進を図った」とか「にぎわいの創出につながった」、ある種曖昧な結果で全て達成となっていますが、本来の目的である「ツクリテの人たちの自立を促す」などの評価ではなく、副次的な効果と考えられる「にぎわいに役に立った」など、本来の目的ではないところで評価が高くなっています。本来の目的を達成しないうちに、この指標が全て達成となっているから次のステージに行ってしまうなど、「これはもう終わった」という評価になってしまう危惧があったため、お伺いしました。

〔事務局〕

ご指摘のとおり、各々の事業について目的に相応しい目標、指標が掲げられるべきと考えております。当然、各々の事業の目的・目標は常に意識しながら取り組んでいます。他方、様々な事業の相乗効果により目的・目標達成につながるということもあり、必ずしも分かりやすい指標でない場合があります。事業目的に対して、現時点で一番適切と考えられる指標を掲げるとご理解をいただきたいと存じます。ご指摘いただいた指標の考え方については、今後検証が必要であることは認識しているところで。

《座長》

私も他市の総合計画とか、また、昨日は国の重要政策事項に関する会議に出席したところですが、どこでもこういった目標があり、それに対して指標（KPI）で進捗状況を測り、議論しています。国を含め、どこの市も同様ですが、適切に表す指標の設定は難しいところです。これが指標として適切かどうかという議論はあると思いますが、代表的な指標として示しているということだろうと思います。

大事なものは、この指標を見ながら、単にその指標だけで物事が進むのではなく、それについて本当にそう思うかどうかを含めて議論することです。本日の評価委員会を含め、皆さんの意見を伺いながら、本当にこういうことでうまく進めるか、ということについて定性的な議論ができると良いと思います。

〈委員〉

資料3で、都市像3のレーダーチャートで「⑧障害者福祉の充実」が100%と出ているのですが、その指標は「1人あたり障害福祉サービス等・障害児通所支援等事業所数」となっており、事業所の数が充実していることを示しています。この指標に基づく達成率100%をもって、「障害者福祉の充実」が100%なんだと思われかねず、これは誤解を招く可能性があるのではないかと思います。

《座長》

そういった細かいご意見をいただけたら結構です。ありがとうございます。

【意見交換】

《座長》

次に、委員の皆様から様々なご意見をいただきたいと思います。

今、見ていただきました指標の動きや瀬戸市のこれまでの取組みを見て、委員の皆様には様々な知見や経験から、この取組みは良い、また、この取組みは改善したほうが良いなど、多様な想いがあるかと思っています。今後、取組む必要がある点、アイデアなども含めて、委員皆様からご専門の見地から発言をいただきたいと思っています。

〈委員〉

私は菱野団地にある八幡台の自治会長もやっております、その立場からの狭い範囲でお話しさせていただきますと、菱野団地は人口減が本当に多い地区でして、一番多いときの人口は約2万3,000人でしたが、現在約1万3,000人と1万人減少している状況です。

菱野団地は、様々な方々を迎える住宅団地で開発されたのですが、現在、そんな状況ではなく、どんどん若者が減少する状態が何年か続いています。少子高齢化が進み、高齢者比率が40%以上、高い地域では50%を越す地区があります。

そんな状況の中、市から八幡、原山、萩山の3団地合同で住民バスを走らすというお話をいただきました。3団地が重なる路線の調整には難航しましたが、住民バスが無事に走ったときには、本当に3つの団地がまとまる形ができました。それから3年ほど住民バスを走らせていただいているが、1日あたり延べ約100人の方が乗ってもらうほど順調に動いています。

その絡みでもう1つ、「未来の菱野団地をみんなで作る会(みんなの会)」を立ち上げています。商店街、中央広場、団地全体を何とか活性化したいと考え、いろんなことができないかということ住民全体に声かけをしています。

カタリバ(菱野団地再生計画の策定に向けて進められている住民ワークショップ)がきっかけとなり、去年の末、中央広場と商店街を使って、菱野団地わいわいフェスティバルを実施し、全部で約2,000の方が集まりました。団地内の商店街に協力していただきましたが、商店街の人たちから「こんなにぎわいは本当に何十年ぶりだ」とご評価いただきました。

瀬戸市の人口の約1割が菱野団地に住んでいるので、個人でやるのではなく、住民全体で動く形でぎわいを作って、こういう活動をどんどん進めていきたいと思っています。

最近、一部ですが、大きい敷地の空家だったところが、半分の敷地にして2つの戸建て住宅として売り出されていたりして、そこに若い方が徐々に住んできています。人口の減少を止めたい、まちの活性化をしたいと考えていますので、計画にも何か書き加えられないかなと思っています。

《座長》

委員におかれましては、菱野団地に大変積極的にご尽力いただいています。菱野団地の抱える問題は、瀬戸市の各地域でも出てくる、もしくは、すでに出ていると思います。例えば、水野地域は90年代後半に開発されて比較的新しい方が住んでいます、そうやって大きく人口が流入してくれば、それらの方々が高齢化して人口減を迎えるということがあるのです。その

先導的な地域としての菱野団地の取組みは、各地域、瀬戸市全体にいい学びとしてつながっていると思います。

〈委員〉

中心市街地の空き家の促進補助金（老朽空き家等解体補助金）については、予算が足りないのではないかと感じています。

中心市街地は古くからの町でもあり、解体しなければならないような古家がたくさんありますが、解体後、すぐ売れています。例えば、11月に壊したものが12月に転売され、12月にはその新しい建物に名古屋市方面から30代の方が越されてきている現状もあります。こんなところが売れるのか、とっていたようなところが売れています。その他近隣でも、大きな工場が解体され、その後、建売が建ちましたが、早く売れています。

いよいよ小中一貫校が開校しますが、やはり小中一貫校学区であるという立地が要因になっているようです。9年間心配せずに同じ環境で子どもを通わせることができる学校に近いということが、子育て世代には大変魅力的なようで、あの近くの古家解体を促進すると、もっと若い人たちが寄ってこないか、という想いで見えています。

以前に比べて、ずいぶん取り壊しが始まっていますので、更に促すため、取り壊し費用の増額を考えるべきだと思います。参考資料3の指標では達成率100%ですが、予算が小さければすぐに100%となるため、予算を拡大し、積極的に取り組んでいただきたいと思います。

《座長》

空き家対策は今、瀬戸市でも重点的に進めていると思いますが、予算面のほか、いろいろ改善すべきものがあると思います。

人口の指標において、社会増となっていますが、上手な供給をしていかないと、他市の供給している地域に取られてしまいます。特に、豊田市は供給する場所があまりなく、今の時代、あまり好ましくはありませんが、市街化調整区域に地区計画を展開し、そこに住んでもらうことをやっています。瀬戸市の場合は、旧市街地に空き家が存在しており、供給できるのに、供給元になっていない部分があるので、改善できれば今後も社会増がありえると思っています。

〈委員〉

参考資料3の都市像1に「シティプロモーション推進」があつて、「今後、定住促進に向けたシティプロモーションを推進」とあります。瀬戸市のシティプロモーションは様々な取組みがあり、「シティプロモーション」という言葉も浸透していると感じています。しかし、「住みたいまち」と「行きたいまち」は違うのではないかと考えます。

「住みたい」には医療、福祉、教育、また、利便性が大事です。他方、働く場所は瀬戸市でなくても、瀬戸市から通いやすかったら瀬戸市に住みたい、暮らしの利便度が高ければ瀬戸市に住みたい、と感じているので、定住促進に向けて更なる取組みを実施していけると良いと思います。

また、「誰もがいきいきと、安心して働くことができるまちづくり」が政策4にあるのですが、「誰もが」というのは「すべての人が」ということです。私が良く相談を受ける内容に、子ど

もに障害があり、放課後等デイサービスや児童発達支援に対する支援は瀬戸市にはあるものの、今のキャリアを生かして働きたいというものがあります。帰宅時間が遅くなっても、重い障害がある子どもをみてもらえる、また、障害のある子どもだけではなく、大きくても1人で留守番できなければ、その子をどこかでみてもらい、今の仕事を続けられる仕組みが市独自でできないかと考えています。特に、医療的ケアが必要な子は使える事業所が少ない現状であると考えます。

障害のある方も税金を納められることを目標としている親も多いと思うので、テレワークでの障害者の雇用を促進することや、大きな企業が特例子会社をつくり障害者を雇用する、また、アートの視点から障害者を雇用することによって、ノベルティグッズ・名刺の作成をする、という取組みもあるので、そのような仕組みをつくってくれる企業がないかとも思います。

都市像2に不育症治療支援という事業がありますが、市民に浸透しているのかなという部分で疑問に思っています。例えば、市外の病院へ不育症で通っていたら、その支援策を知ることができるのでしょうか。対象となる方が、情報をキャッチできなければ意味がなく、私もラジオオサンキューで、さまざまな情報を一生懸命発信していますが、残念ながら、情報の発信の仕方にも問題があるのかなと常に考えています。「そんなにいいイベントがあったの」とか、「そんなにいいこと、やってるの」と聞かれることも多く、「これは広報にも載っていたよ」とか、「一生懸命ラジオでも言ったよ」と伝えても、情報の受取側のニーズを的確に捉えた情報の発信について、もっと考えなければいけないのかなと感じます。

都市像3に認知症対策があり、認知症サポーターは受講者が1万人もいると聞いており、私もオレンジリングを持っています。ちょっとぼんやりとした意見ではありますが、その人たちの力をもっと活用して何かできないかなども感じています。

防災には当然、取り組まなくてはなりません、防災リーダーだけではなく、末端にまで意識が行き渡るようなことができないかと感じています。市役所にも防災グッズ展示が以前はありましたが、大規模な災害がないと、ラジオの必要性も感じてもらえないこともあり、民の力でできることもあるのかなと、総合計画の間ではありますが、常に思っています。

《座長》

様々なご意見をいただきました。まずは、「住みたい」という視点は非常に大事にしていかななくてはなりません。「誰もが」ということに対する対策、情報発信や広報のあり方について、今後の取組みについて考える必要があり、また、認知症サポート、防災についてももう少し取り組む必要があるというご意見でした。

〈委員〉

今の林委員の話の流れを受けてですが、私は仕事柄、今まで10か所ぐらいの地域を渡り歩き、委員の中では珍しく市外出身者です。自身の仕事でも様々な場所に行くことが多いですが、最近、気にし始めたのが、障害を持った方が普通にまちを歩いていらっしゃるかどうかという視点です。そういうことから「住みやすいまち」なのかどうかについて、気にするようになっていきます。瀬戸市のアピタに行くと、割と障害のある方が買い物にいらっやっていますが、都会に行けば行くほどそういう方が減って、実は暮らしにくいかもしれないなとも思っていま

す。

瀬戸市は「住みたいまち」を掲げています。私は、平成8年から瀬戸市に住み、名古屋市に会社員として7年間通っていましたが、その時、瀬戸市は単なる寝床となっていました。瀬戸市のことは何も知らないし、正直、愛着も全くなく、便利なところに越したいとばかり思っていました。たまたま、平成20年度から瀬戸市で「しごと塾」の仕事をさせていただくようになりまして、地域にいろんなプレイヤーがいることを知るようになりました。「地域の課題をこういうふうで解決していく」という方を今まで200人以上見せていただいて、それが分かってくると、徐々に居心地がよくなってきました。「ああ、自分の暮らしているところはこういう人たちが支えているのだ」と実感できます。このようにまちづくりに参画できる機会が多ければ、もっと居心地が良くなる人が増えてくるのではないかと思います。

一方、PTA役員経験者としては、PTAの仕事は、やらされ感があり、引受けてくれる方が全然いません。負担も重く、特に男性の方がおらず、様々な会合で、昨年もピーク時では週4回会合に出なければいけません。これでは特に男性は無理であると感じたところです。会長は代々男性が引き受けるルールがあり、誰かがやらなければいけないので、手を挙げましたが、重たすぎる業務では、地域への関わりに限界があるのかなと考えます。

また、私は起業や起業した会社をどうやってそれを持続するかという相談を受ける仕事メインです。やはり生活基盤をつくりたい方がたくさんいますので、「何をやったら儲かりますか」という相談も受けることがあります。そのときは決まって「誰がやっても儲かるなら、誰かがやっていますよ」と答えています。その仕事を誰が担うかによって、上手くいくかどうか変わってくると思っています。

市は第三者に委託する事業がたくさんあるかと思いますが、「誰がやるのか」という部分を大事にしていきたい。地域をより良くしようなど、ポリシーを持っている会社や人に委託しないと、お金だけ消化して終わってしまったという地域の問題をたくさん見てきました。創業支援も単にお金だけを使って終わってしまう、何億円と使って人件費に消えて結局終わってしまったという事例も見ていますので、お金の有効活用をしていただけたらと思います。

最後に「教育」についてです。私は長根在住ですが、自分の子どもが小学校3年生ということもあり、妻が「小中一貫校、いいな」と指をくわえて見えています。小中一貫校に通えない人たちにも、教育関係で誇れるものがあると、もっともっと住みたいと思う方が増えると思います。例えば、うちは図書館のヘビーユーザーで、必ず3人分30冊を借りに月1回のペースで利用しています。「図書館が魅力的」ということは、小中一貫校の近隣地域だけではなく、瀬戸市は子どもを育てて学ばせるにはいいぞ、となるのではないかと思います。具体的に何が、というものがあるわけではないですが、自慢できるものがあるといいのではないのでしょうか。余談ですが、お隣の春日井市の図書館は大変立派です。ただし、お金を使えば、立派なものではできますが、その視点のみでなく、知恵を絞り、いいものをつくっていただきたいと思っています。

《座長》

「住みやすいまち」についてや、「瀬戸市にはプレイヤーが沢山いる」という、人材的なことについて、また、働く世代が地域に参画しやすいようにという意見をいただきました。瀬戸市は教育面では、図書館協議会をつくられていますので、そこでも様々な議論ができればと思い

ます。

〈委員〉

瀬戸市という市役所の施策だから、仕方がないのかもしれませんが、ターゲットが不明確だとすごく感じます。

例えば、子育て支援に関しても人口増加を目指していて、それに伴って税金をたくさん納めてくれる人というイメージです。うちは共働き・正社員・フルタイムで、私と主人の給料は一緒みたいな家庭です。私たちのようなそういった世帯をターゲットとして増やしたい、お金を瀬戸市に落としてくれる人を増やしたい、ということであれば、子育て支援でももうちょっと違う施策があるのではないかと思います。

保育園も増えていますが、夜、預かってくれるところはなかなかありません。私は東京に出張とか、外に出る機会が多いですが、実家が瀬戸市にあるから瀬戸市で子育てできています。夜、預かってくれる地域のボランティアの方とか、そういったところがないので、ターゲットを絞ることによって、見えてくる施策が違うと感じました。

最近、千葉県流山市ではマーケティング課をつくって、ちゃんとターゲットを絞って、ターゲットと目標値を掲げているんな施策をしています。

今、自動運転とかも進んでいるので、子どもをバスに乗せて駅まで送ってくれることが可能になれば、それだけでも30分多く働けるので、私たちの仕事をするモチベーションが増えます。それぞれのターゲットに対して何か目玉があると、それに食い付いてくると思うので、ターゲットをもう少し明確にして施策を立てていったほうが良いと感じました。

それと、私はIT企業に勤めていますが、参考資料3の2ページに「ソフトウェア企業誘致」とありますが、ソフトウェア企業を誘致することによるメリットやその意図は何なのでしょう。

〔事務局〕

今はテレワークも行えるようになってきていますが、「まち・ひと・しごと」のところでソフトの施策の取りまとめをしていた4、5年前、例えば、瀬戸市の陶磁器はこうだ、現状の工場の状況はこうだ、観光は今までこうやってきた、商店街はこうだと全体を含めて見たとき、まだ手を出していない分野で、これから可能性のありそうなところはどこかという議論の中で、当時としては先進的であるソフトウェア企業をターゲットとしました。選択理由としては、あまり投資がかからずに起業できるとか、技術進歩と革新と世の中の状況とが合致したときに目指す方向の1つとしてありではないかというような理由によるものだったと解釈しています。

〈委員〉

ほかの都市でも見られることだと思いますが、先ほど他の委員が述べられていたように、私も含め、結局名古屋市に勤めて、瀬戸市には寝に帰るだけみたいな方も多いのではないのでしょうか。

実は、私は今日の午後から在宅勤務（リモートワーク）になります。新型コロナウイルス感染拡大の防止対策として会社から「できる限り在宅勤務をしろ」と言われており、自宅にはたまたまパソコンがあって、それなりの環境が整っているので対応できています。

他自治体では、産業支援施設において、積極的なリモートワークを推奨している等の話を聞いたことがあります。実現するには、それぞれの企業のセキュリティー問題もあるので協議が必要であると思いますが、せっかく土地があるのであれば、ソフトウェア企業を誘致するのではなく、住みながら近くで働ける環境を瀬戸市がつくっていくことを考えていいのではないのでしょうか。

私も今日の午後からネットワーク会議があります。確かにソフトウェア企業は、会社に行かなくてもネットワーク会議、テレビ会議、リモートワークなどというかたちで勤務できるため、仕事をやりやすい産業ではあります。ソフトウェア企業などIT業界はリモートワークをしやすいので、それに絡めた企業誘致という意味ではいいのかなと思いますが、企業だけを瀬戸市に呼んでも意味があるのかな、という感じがします。

《座長》

人口増を狙うのであれば、どういったターゲットを狙っていくかでやるべき施策が異なってきます。今、リモートワークの話がありましたが、新しい働き方として大切な視点ですので、参考にしていただきたいと思います。

〈委員〉

将来像「住みたいまち 誇れるまち 新しいせと」に掲げた指標の状況の1ページの「社会増減の傾向」の右上のグラフを見る限り、30代（30～34歳、35～39歳）は増えていますが、20代前半（20～24歳）は大きく減少している状況です。私自身は23歳のときに瀬戸市に帰ってきたのですが、子育て世代とそれに付随する子どもたちの転入が増えていることで93人の増となっていることが分かります。

名古屋市や豊田市に働きに行き、住むところは瀬戸市という状況が増えていると考えられますが、この状況が長く続くかどうかという懸念があります。なぜなら、転入する人が増えることで実際に数値にも表れていますが、土地代、つまり地価が上がり、路線価が上昇しているからです。そのため、長期的に見たらこの状況には限界が来るのではないかと思いますし、結局、名古屋市に働きに行くということでは、やはり愛着は薄れていくように感じます。

「新しいせと」というまちがベッドタウンになるとすれば、それは「誇れるまち」ではないかと考えます。先ほどの他の委員の意見のように、「リモートワークで働ける」といった特徴をつけて、そのターゲットに対してアプローチするなど、そういったことをしないと難しい現状があると思っています。

では、20代の人々が瀬戸市に来て、「瀬戸市で何かしたい」と思わせるには、どういうことが必要なのだろうかと考えました。今はどこでも働ける時代で、リモートワークとか、自分のやりたい仕事は別に場所を選ばずにできます。都会でもできるし、本当に田舎でもできる状況の中で、その地域を選ぶのは、「行きたい企業がそこにしかない」か「自分でしたいことをするときその地域が適している」か「その地域に愛着がある何かがある」ということではないかと思いました。

このターゲットとなるのは、他市に住んでいるがこのまちに興味を持ってくれそうで、既にツクリテとしてやっている方か、瀬戸市に住んでおり瀬戸市に関わる高校生や大学生、また、

フリーターやニートといわれている人たち、そういった人に新しくアプローチをかけていくことが必要ではないかと考えます。

特に、ツクリテさんや大学生やフリーターの方に、このまちにはすでにサポート体制が整っていることが情報として伝わっていないのではないかと感じています。私自身は「せと・しごと塾」とか、空き家活用の補助金やツクリテセンターをすごく活用させていただいて、瀬戸市のサポート体制は優れているというか、すごくありがたいと感じていますが、他市の自分と同じような人たちにそれが届いているのだろうかといったら、届いていないような気がします。きちんと情報として届けて、10代、20代の方が転入しやすい状況をつくる必要があるのではないのでしょうか。

あと、小中一貫校ができることによって教育にこれから注力していくと思いますが、より重要なのは高校ではないかと個人的に考えています。高校生の時点で、これからどうしていきたいかを考えることが多いので、高校生のときに瀬戸市で働く、瀬戸市に関わってみたいと思う人が一定数出てくる仕組みをつくる必要があるのではないかと考えています。

恵那で先日、ビジネスプランコンテストがあったのですが、社会人だけではなく、高校生を対象にしたものも入っていました。

そのプレゼン内容がすばらしかったと情報がSNSなどで広がって、高校生のツイッターでも「恵那はおもしろいな」「ここで何かやったらいいじゃん」みたいなかたちで広まっていき、若い世代がそこへ戻ってくるような、そこに引っ越したいと思うようなきっかけを植え付けることをやっていけたらいいと思いました。

《座長》

委員自身がお若いので、ご自身のご経験を踏まえて、若い人たちに対してどういうことを進めていくか、特に若い人たちに情報をどう伝えるか、そういったご意見をいただいたと思います。

〈委員〉

企業は厳しい時代を生き残るためには、強みにより磨きをかける、連携する、様々な取組みで事業を曲がりなりに何とかやっていますので、企業人の立場からそういう観点で申し上げたいと思います。

言葉5は悪いかもしれませんが、総合計画自体が総花的で「何でもひととおり」「よそのまちにあって瀬戸市にないものはいかん」ということで全てが網羅されているように感じます。これはレーダーチャートの目標となる8割をやれば、「そこそこのまち」ということになりますが、果たしてそれは本当に「誇れるまち」になっているのでしょうか。行政とは別かもしれませんが、事業では強みや突出するものがあって何とかそれが成り立っているわけです。

「誇れるまち」ということを掲げているが、「住み続けたいという意向」や「まちへの愛着」が総合計画の始まった平成28年よりも令和元年の方が落ちていることを考えると、魅力づくりに磨きをかけるのはなかなか難しいのだな、と感じています。

都市像2に「安心して子育てができ、子どもが健やかに育つまち」とあります。私は先ほどの小中一貫校として統廃合されたなかの1校で育ちました。その1校の学校評議員を20年近

く5務めてきました。しかし、新入生が入ってくる時期になると、近接地域である陶原、水無瀬の学区に行きたい人がごそと抜けて、「新学年になったら5こんなに減った」というようなことがずっとありました。

小中一貫校もどうなるかな、と思っておりましたが、2月1日に子どもたちが素晴らしい学校を見て感動したようで、親の意識も「ああ、ここでよかった5」と変化したように感じています。

それと同時に、不動産会社から「にじの丘学区で土地や物件を探している人が最近増えた」と聞きました。他の委員が述べられたように、古い建物を壊して、そこに新しい家が建っています。このことが、中心市街地の古いまちなみの風情にいかどうかは、「陶の路」のいろんな委員をやってきた立場からすると、ちょっと目を覆いたくなるような物件も中にはありますが、それほど状況が一変しています。

それを考えたとき、仮に企業が何十億という投資をしたならば、投資の費用対効果をしっかり取ろうということで、それを売りに出すべきと考えます。今、子どもたちの意識と親御さんたちの意識が変わっている現状があるので、にじの丘学区をどうやって売っていくのかをもっと考えなければいけないと思います。都市像2の中の事業には、空き家対策促進事業、シティプロモーションがあるますが、こういう枠組みにありながらバラバラに行われていると、せつかくの何十億という投資も「あれはあっちの話」「それはどっかの話」で終わってしまい、本当にもったいないと感じます。この学区は「何年後かにこのままでは過疎というか、子どもに悩まないかん。今は2学級あるが、1学級になるよ。1学級もおぼつかない数字になるよ。」とさんざん聞かされてきましたが、増やすことを考えると、今、本当に売りのタイミングかなと考えます。行政の立場では枠を越えてというのは難しいかもしれませんが、こういう大きな投資をした案件についてはそのような取組みがあってもいいのではないかと思います。

産業の立場からいうと、都市像1の「ノベルティ・こども創造館」と「新世紀工芸館」と「瀬戸染付工芸館」は、全てにじの丘学区に立地しています。この3つとも祖母懐連区と深川連区にあるのですが、これもバラバラでは効果があまり出ていないのではないかと思います。

「ノベルティ」は全国に数あるやきもの産地でもオンリーワンです。「新世紀工芸館」はガラスですが、やきもの産地でガラスをこれほどまで頑張っている産地はほかにないと思います。また、「染付」は瀬戸市が誇れる、民吉以来、200年有余の瀬戸市の伝統産業指定のものです。この3つの施設の目指すものは、全国のやきもの産地に対しても瀬戸市がオンリーワンを誇れるものなので、これを融合させて、新しい時代の工芸を目指していかなければいけません。

一つひとつでやっているのと、過去を振り返るだけになってしまい、「ああ、あかん。せとは終わった。将来はない。」という考えにどうしてもなってしまうので、個々に評価するのではなく、連携をすることで魅力ある「誇れるまち」につながるのではないかと思います。特別な投資をすとか、そういうことではなく、今あるものを生かすことで魅力が増してくるのではないのでしょうか。この総合計画にそれが反映されるかどうかは分かりませんが、ご検討いただくとありがたいと思います。

《座長》

にじの丘学園を例に挙げて、新しい誇れるものができたことを人口増加につなげていく取組

みを徹底すること、また、伝統的なものについても、新しい視点を加えて魅力を高めていくことが必要だとのことのご意見がございました。

〈委員〉

3つお話しさせていただきたいと思います。

1つ目は自分の専門にも関わりますが、私は今、専門的に育児と介護のダブルケアの研究をしています。育児と介護を担われている方が晩婚化や少子高齢化が進む中ですごく増えていますが、名古屋市や愛知県には支援制度もそういった団体もなかったもので、昨年立ち上げて、今、私はダブルケアの支援団体の副代表もさせていただいています。

分野や制度をまたぐようなケア課題の複合化がすごく増えて、ヤングケアラーや若年性認知症の方を含めて、「介護」「育児」「仕事」「教育」そういった分野を超えて絡んでくる問題が増えていこうと考えています。このような指標で測っていくのが難しい課題にどう対応し、それをどう測っていくかは大変、難しいですが、これから求められていこうと思います。

今、愛知県にはこういった複合化した課題に対応する窓口を持っている自治体は1か所もないですし、全国的にもまだまだ数えるほどで、5か所もないという状況です。先進的な住みやすいまちを目指していく中で、複合化の課題に行政と企業、市民団体、それぞれが一体となって進める地域になっていくとすごく良いと感じます。

認知症のオレンジリングの活用ですが、ダブルケアの方がよく言われるのは、「もっとケアのことを知っておけばよかった」「備えておけばよかった」「家族で話し合っておけばよかった」ということ5が多いです。また、『ケアに備えていこうよ』と普及啓発してもらえるようなことをやってもらえないかとか「研修を開いけてもらえないか」というご意見もいただきます。熱田区において、認知症予防リーダーのような、すでに認知症への理解があるような方たちにこのような活動への参加を働きかけていけたらと計画を進めているところです。

2つ目ですが、私は学生や子育て世代の方たちと一緒に何かをさせていただくことが多いのですが、地域の活動では、その発想や考え方が、防災訓練一つとっても従来の考え方とは違ってきていると感じます。この間、課題で学生に「どんな防災訓練だったら参加したいか」と聞いたのですが、謎解きゲームと絡めたり、アプリと絡めたりして、例えば、指定避難所とかを謎解きのような感覚で回って、そこで謎を解くことが防災訓練の一環となるような内容を挙げたりした例がありました。

子育てのお母さんたちも、先ほどの働き方、仕事の話もそうですが、既存の助け合いの仕組みを使えていないといった声があり、「どんなものがあったら良いのか」と聞くと、ウーバーイーツみたいに子育てをシェアリングできないかといった発想があって、子育て世代もアプリを使った気軽な助け合いシステムを求める声があります。

私はアナログ人間ですが、新しい地域の助け合いの仕組みを、若者世代の新しい視点を取り入れながら進めていってもらえるといいなと感じました。

3つ目は、菱野団地の一住人としての経験です。私は、菱野団地にもものすごく活気があってマンモス校だったころの八幡小学校の出身ですが、ずっと自分はよそ者だと感じていました。

「やきものまち 瀬戸」と言われますが、菱野団地はサラリーマンが多く、やきもの産業に

携わった人があまりいませんでした。授業で瀬戸市のことを学んでも菱野団地はあまり出てこなくて、よそ者なんだという気持ちで幼いころから育ってきたように思います。「瀬戸市はやきもの」と言われても、私たちには無縁だったのでよそ者だと感じていました。

やきものもあるのですが、教育とか、新しく来た住人が「自分たちのまちだ」と思えるような柱が育っていくと、瀬戸市から離れるときにもっと愛着が持てたかなと思います。私は大学を卒業して就職のときに出ているのですが、その当時、瀬戸市に残ろうかなと思わせてくれるようなものがあつたらよかつたと思います。

菱野団地では人口流出が続いていますが、その一方で、菱野団地ほど大きくなくても新しい団地がたくさん造られています。そのような新しい団地で人口流出が起こる前に、菱野団地を一つのモデルとして、瀬戸市で育ってきた愛着心みたいなものを育てていくことが大事になってくると考えています。

《座長》

ダブルケアのような複合的な課題をどのように解決するか、スマホのアプリの導入など新しいものを使った課題解決策、瀬戸市にきた新しい人たちなりの瀬戸市の魅力を見つけて貰い、根づかせていく視点などについてお話をいただいたと思います。

【今後取組むべきテーマやアイデアについての意見交換】

《座長》

今、ひととおりにお話しいただきましたが、まだ話し足りないとか、様々なお話を聞いた上で私はこう思うというところがありましたら、ご意見をいただきたいと思います。

この中で特に若く、Uターンされている委員から、今のお話を聞いて感想みたいなものがありましたら是非ご発言いただきたい。

〈委員〉

瀬戸市には約13万人が住んでいて、いろんな考え方の人がいるな、立ち位置が全然違うなと思いました。第6次総合計画の将来都市構造で、地域拠点と中心拠点という考え方がありますが、尾張瀬戸駅、新瀬戸駅を中心拠点として、中水野、水野、瀬戸口、菱野、山口、品野というかたちで地域拠点が存在します。それぞれの地域のあり方を考えていくことで、見せ方が変わってくるのではないのでしょうか。13万人いる瀬戸市全体の見え方を統一していくことは難しくても、地域ごとに、ここは子育て世代がすぐく住みやすい地域とか、名古屋市ののに働きに行きやすい地域とか、その人が買い物に行くときはあそこの地域に行きましょう、みたいに。その連携を図ることで、瀬戸市全体として潤滑に回っていくようにならないかと思いました。

《座長》

瀬戸市は尾張旭市や長久手市と違って市域が広いので、それぞれの地区でそれぞれの誇りが恐らく必要になってくると思います。

〈委員〉

「瀬戸市の主な駅はどこ」と聞かれたとき、私は尾張瀬戸駅だと思っていますが、どこの駅をイメージするべきなのかなと考えてしまいます。瀬戸線の新瀬戸駅は愛知環状鉄道と隣接しており、瀬戸信用金庫、陶生病院、図書館もあることから、ひょっとすると市外の人にはあそこ

をイメージしているのかな、と思います。

先日、北川民次さんのアトリエ公開のとき、アトリエを目指して来た方に尾張瀬戸駅でお会いして、「タクシー乗り場がないね」と言われ「あちらにあります」と北側にご案内したことがありました。瀬戸駅というと、どこのことか、どちら側のことなのかな、と思います。

《座長》

瀬戸市には様々な方がいらっしゃいますが、市外から見たとき、瀬戸市のイメージはどこで象徴されているのか、というのはありますね。本当はもっといいところがあったりするのですが、そういうところは情報が発信できていないとか、そういう課題もあるかもしれません。

〈委員〉

まちなかで「せと しごと塾」関係の方がいらっしゃるのですが、塾生さんが瀬戸市にどうやったら定着するかを考えるようにしています。

例えば、南委員が来られたときは、瀬戸市で楽しく事業を続けられて、住み続けてほしいなと考えていました。そのために何ができるのか、プレイヤーとして何ができるかということで、相談に乗ったり、アドバイスさせていただいたりしています。

先ほど、他の委員が「ターゲット」とご発言されたように、この人を定着させるには、この人がさらに別の人を呼んでくるには何をすれば良いのか、について考えると、具体的に「じゃあ、こういうことをしてみようか」と広がっていきます。南委員は「しゃべりたい」というのがあったと思うので、しゃべる機会を自分がつくれたら声を掛けてみようということで、今度は春日井市でしゃべっていただくことになっています。ターゲットに対して、個別にペルソナに絞っていかないと、「全体的にポン」ではなかなか個人々に当てはまらないような気がしています。

「せと しごと塾」は縁あって瀬戸市外の方もたくさんいらっしゃる場所なのですが、「どうやったらこの人が瀬戸市に定住してくれるかな」ということは常に考えています。中心市街地の商店街にこだわらず、瀬戸市を気に入ってくれる方がいれば、自然と他の皆さんと交流してくれるので、無理やり押すわけではなく、その方が瀬戸市を選び、暮らしてくれないかと思っています。

先ほどの「ターゲット」という考え方はいいかなと思いましたので、ぜひ狙い撃ちでうまく人を瀬戸市に運んでいただけたらと考えます。

《座長》

今、瀬戸市で若い人が減少しているわけですが、若い人が数人で楽しそうに瀬戸市で暮らしていると、そこにまた人が集まってくるところがあります。南委員のコミュニティも色々な人たちとつながっていると思います。住む人もいるし、外から何回も何回もやってくる人もいますので、そういう中で、若い人たちは「瀬戸市っていいな」と何となく思っていくと思います。

逆にそういう人がいないと、10代の時に何も瀬戸市に誇れるものがないとなり、瀬戸市外の高校や大学に通い外を見せようと、そのまま外へ出ていってしまうことになります。

瀬戸市で芽のようなものがどんどん大きくなって、これからもどんどん育っていくような魅力は、瀬戸市には実はたくさんあります。私も瀬戸市出身で、高校生まで瀬戸市に住み、市外の高校に通っていましたが、そのとき正直、瀬戸市が好きではありませんでした。中学はもの

すごく活気があって楽しかったですが、瀬戸市の魅力は全く理解していなかったかもしれません。ところが、たまたま戻ってきて、よく見ると、おもしろいところがいっぱいあることに気付いたのです。埋もれた宝がいっぱいあり、その宝は単に古いだけではなく、新しく変わっていった宝になっていくものもあるので、そういうものを磨き上げて、いろんな人たちに情報発信していくことが重要です。先ほどターゲットという話もあって、広く薄く情報発信しても、誰にも届かないので、「このターゲットを狙って情報発信しよう」など、そのような施策の展開がこれからどんどん必要になるだろうと思います。

皆さんには今日この指標や取りまとめのものをしながら、それを解釈して、いろんな視点でご意見をいただいたかと思います。もし言い足りないことがありましたら、お聞きしたいと思いますが、何かございますか。

〈委員〉

私は市内でゲストハウス（宿泊施設）を運営しており、自分の中で当たり前になっていたのですが、若い人がすごく瀬戸市に遊びに来られます。大学生とか、20代とか、昨年一年で約800名の方が泊まりに来てくれて、約7割は若い人です。商店街を見て、そのまちなみを見て、喫茶店に入って、各々の楽しみ方ですごく満足度が高く帰っていかれ、また、リピーターとして来てくれる方もいます。このように、瀬戸市の中心市街地が若い人にとってすごくおもしろいものだという実感があったので、そのことだけ伝えさせてもらえればと思いました。

〈委員〉

今朝も出掛けに「時差出勤でもやったらどうだ」という話をしてきたのですが、時差出勤するほど込んだ電車に乗ってこないということがよく分かりました。瀬戸市から名古屋市へ通う人が多く、私のように瀬戸市で生まれ瀬戸市で育ち、瀬戸市で勤めてという人が圧倒的に少なくなり、私が就職したころとは時代が変わりました。名古屋学院大学などの学校が名古屋市へ移転してしまったという理由も一つではあるのですが、皆さんがおっしゃるように、瀬戸市で生まれて名古屋市で学校を卒業してから瀬戸市へ戻ってくるというイメージがなかなか持てません。

私どもも、何とか地元の方に優先的に就職してもらいたいと一生懸命やってはいるのですが、どうしてもそんな感じになっているのが現実です。うちに役員が11人いますが、瀬戸市で税金を払っているのは私ともう1人だけで、あとはみんな郊外で税金を払っています。なので、私も協力するつもりで「瀬戸市へふるさと納税をせよ」とちゃんと指示はしてありますので、みんな払ってくれていると思います。

瀬戸市の歴史の中でずいぶん働く環境も変わってきたという状況にあることは間違いないと思いますが、これをこちらへ戻すという潮流を作らなければいけません。そうするには、どういう魅力が必要なんだろう、という先ほどの話になりますが、われわれ委員や役所も含めて、いろいろとPRしていくことではないかと思いました。

《座長》

瀬戸市に住んでいただくことは非常に大事です。言い方は変ですが、税収面に非常に大きな影響があります。財政的に厳しい状況にありますから、そういったことに関しての施策も必要ではないかと思います。

4 その他

《座長》

最後に、事務局から何かございますか。

〔事務局〕

熱心にご意見をいただきましたこと、大変うれしく思います。全てを消化できるかどうかは分かりませんが、いただいたご意見は庁内で共有して、可能な限りきちんと展開してまいりたいと考えております。

なお、今後についてですが、最初に説明をさせていただいたとおり、次年度4月以降に年3回程度、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」に関する会議をさせていただきたいと思っています。

少し時間をおいて日程調整をさせていただいて進めてまいりたいと思っておりますが、「5月以降の辺りで日程調整をお願いできませんでしょうか」というご連絡をもう少ししたらさせていただきますと考えてございます。よろしくご協力をお願いします。

以上